



令和6年度 果樹情報 第16号

(令和6年11月7日)



福島県農林水産部農業振興課

1 気象概況 (10月後半、果樹研究所)

平均気温は、第4半旬が17.9℃で平年より3.5℃高く、第5半旬が16.7℃で平年より3.6℃高く、第6半旬が14.7℃で平年より2.4℃高く経過しました。

この期間の降水量は28.5mmで平年比61%と平年並でした。日照時間は77.1時間で平年比87%と平年より少なくなりました。

2 土壌水分 (11月1日現在、果樹研究所)

11月1日時点の土壌水分 (pF値：果樹研究所なしほ場：草生・無かん水) は、深さ20cmで2.0、深さ40cmで2.2となっており、適湿状態です (図1)。

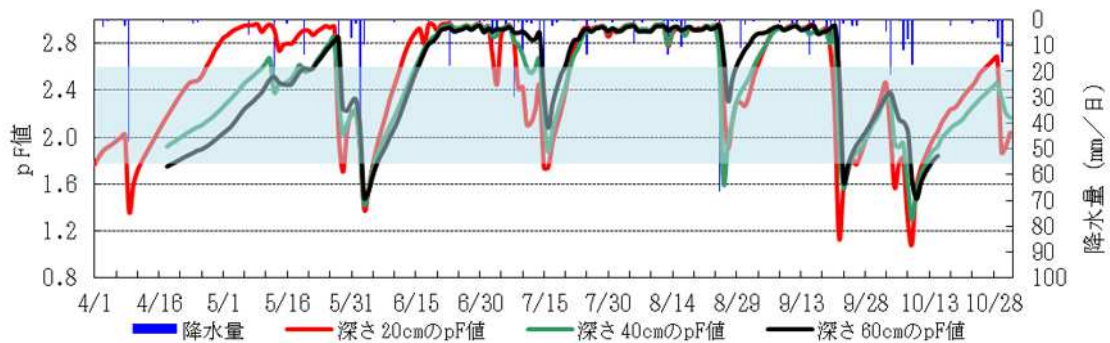


図1 土壌 pF 値の推移 (果樹研究所なしほ場：草生・無かん水)

図中の網掛け部は、適湿の範囲 (pF1.8-2.6)

深さ60cmでは、10月16日から11月1日までデータ欠損

3 発育状況 (11月1日現在、果樹研究所)

(1) りんご

ア 果実肥大

果実肥大を暦日で比較すると、「ふじ」は縦径が84.4mm (平年比100%)、横径が90.0mm (平年比99%)と平年並の状況です。満開後日数で比較すると、平年並となっています。

イ 収穫状況

「シナノスイート」 (M9 ナガノ台) の収穫盛期は10月15日と平年より5日遅く、昨年より2日遅くなりました (表1)。

果実の大きさは292gで平年より小さく、糖度は15.2° Brixで平年並でした。

「王林」 (マルバカイドウ台) の収穫開始日は、10月22日で平年より2日早くなりました。

10月31日 (満開後196日) 収穫時の果実品質 (参考値) は、果実の大きさが302gで平年並、糖度は13.6° Brixで平年並でした。

表1 りんごの収穫状況

品種	収穫開始日			収穫盛期			収穫終期			果実重 (g)			糖度 (° Brix)		
	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年
つがる	8/23	8/27	8/25	8/28	8/31	8/28	9/2	9/6	8/31	297	285	299	13.8	12.4	14.6
シナノスイート	10/10	10/6	10/12	10/15	10/10	10/13	10/21	10/15	10/19	292	344	333	15.2	14.7	14.9
王林	10/22	10/24	10/26	未	10/26	11/1	未	10/30	11/6	302	310	384	13.6	14.2	14.1
ふじ	未	11/14	11/16	未	11/17	11/25	未	11/25	11/25	未	358	334	未	15.5	14.7

注) 平年値は、1991~2020年 (「シナノスイート」は2012~2020年) の平均。下線の値は、参考値。

「つがる」はM.26台、「シナノスイート」はM9ナガノ台、「王林」「ふじ」はマルバカイドウ台

ウ 成熟状況

「ふじ」の満開後 192 日（10 月 31 日）における成熟調査の結果は、果実硬度が 11.7 ポンドと平年より低く、糖度は 14.8° Brix で平年並、リンゴ酸含量は 0.37mg/100ml で平年よりやや低く、デンプン指数が 4.7 と平年並となっています（図 2、3）。果皮中クロロフィル含量は平年より低く、果皮中アントシアニン含量は平年よりかなり低い状況です（図 4、5）。

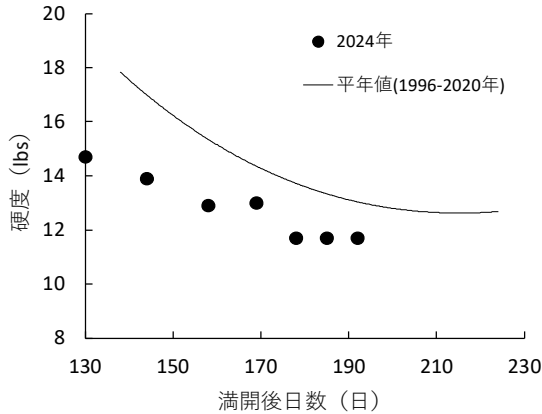


図 2 「ふじ」の果実硬度の推移

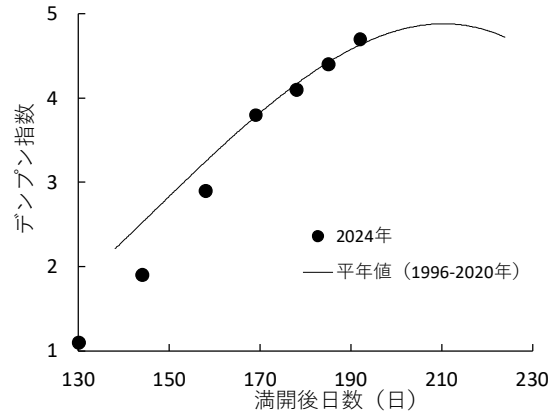


図 3 「ふじ」のデンプン指数の推移

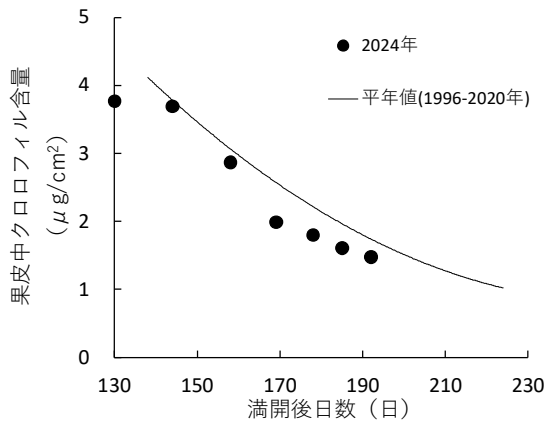


図 4 「ふじ」の果皮中クロロフィル含量の推移

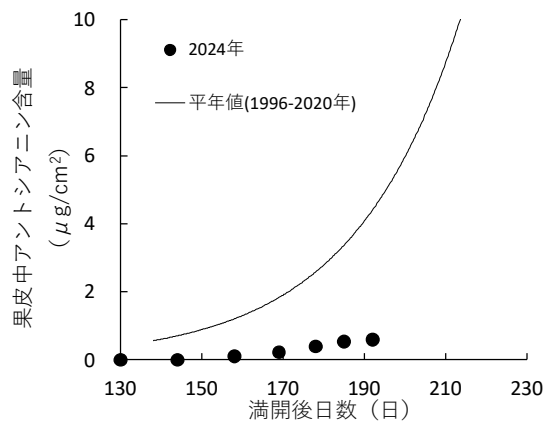


図 5 「ふじ」の果皮中アントシアニン含量の推移

エ 「ふじ」の裂果発生状況

満開後 192 日（10 月 31 日）における「ふじ」／マルバ台果実の外部裂果率は 3.3% で過去 3 年間と比較して同等から少なく、内部裂果発生率は 10.0% と過去 3 年間と比較して少ない傾向であった（表 2）。

表 2 りんご「ふじ」の裂果発生状況（満開後 190 日ころ）

調査樹	樹齢	外部裂果率 (%)				内部裂果発生率 (%)			
		2024	2023	2022	2021	2024	2023	2022	2021
ふじ/マルバ台	22	3.3	3.3	20.0	20.0	10.0	20.0	36.7	40.0

4 栽培上の留意点

(1) りんご

ア 「ふじ」の収穫

果実の着色や蜜入りは平年に比べて遅れていますが、果実硬度は低い傾向にあります。

収穫に当たっては、蜜入りの状態に加えて、果実の着色、地色及び食味等により総合的に判断しましょう。

5 病害虫防除上の留意点

(1) 病害

ア ナシ黒星病

秋期防除は、翌年の伝染源となるりん片への感染予防に重要です。重要な防除時期は、りん片生組織の露出(図6)が多くなる頃(果樹研究所では10月上旬～11月上旬)となります(図7)

(参考：令和4年度普及に移しうる成果 (<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/566356.pdf>))。薬剤散布は、オーソサイド水和剤 80 を 600 倍で使用し、2週間間隔で2～3回散布(キャプタンの総使用回数に注意)し、**最終散布は落葉率 80%頃**を目安に実施します。また、**薬剤散布は降雨前の実施**を心がけ、薬液が棚上まで十分量かかるよう丁寧に行いましょう。

なお、10月31日時点の果樹研究所「幸水」予備枝におけるりん片生組織の露出芽率は37.7%で、10月21日時点(26.8%)から増加傾向にあります。今後さらに芽の露出が増加するものと見込まれるため、気象情報に留意して適期に薬剤散布を実施しましょう。

薬剤散布前には徒長枝の整理等の新梢管理を行い、薬剤の散布むらをなくしましょう。2回目以降の散布では、薬剤のかかり具合を確認し、新梢管理を見直しましょう。

また、園内外の秋型病斑が認められる罹病葉を含む落葉は、翌年の伝染源となるため、適切に処理しましょう。処理方法は、丁寧に集めて土中に埋めるなど適切に処分するか、乗用草刈機またはフレールモアによる粉碎処理(図8)により、落葉が500円玉程度の大きさになるまで丁寧に粉碎しましょう(図9)。



図6 露出した芽りん片生組織(枠内)

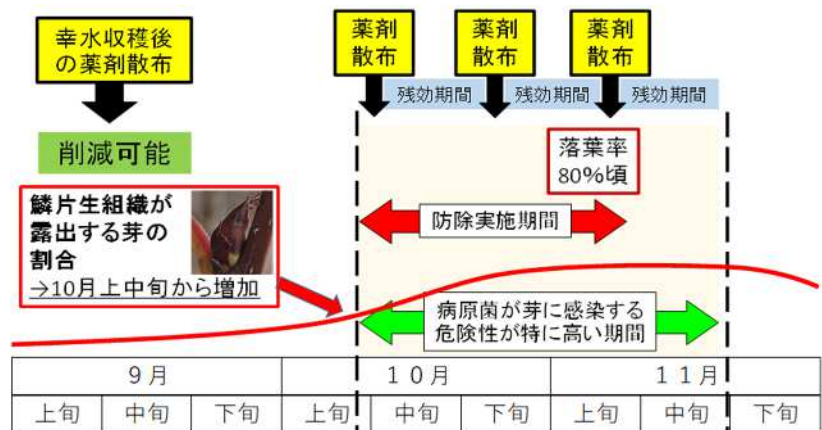


図7 なし及び病原菌の生態に基づく秋期防除の考え方



図8 粉碎処理の状況
(写真：農業総合センター果樹研究所)



図9 粉碎処理の目安
(写真：農業総合センター果樹研究所)

～ 来季用の貯蔵花粉の備えは充分ですか？ ～

国は、中国において火傷病(かしょうびょう)が発生したことを受け、令和5年8月30日に中国からの火傷病菌の宿主となる植物(花粉等)の日本への輸入を停止しました。これにより、中国産のなし及びりんご花粉の供給が停止されるとともに使用ができません。

- 貯蔵花粉が不足する場合には、自家採取等による花粉の確保に努めてください。
- 結実安定に向けた受粉樹の導入を検討しましょう。

病害虫の発生予察情報・防除情報

病害虫防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

URL: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょう。

発行：福島県農林水産部農業振興課 農業革新担当 TEL 024(521)7344

(以下のURLより他の農業技術情報等をご覧いただけます。)

URL: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/>